

## 9 月第 1 週の礼拝説教

■日 時：2023 年 9 月 3 日（日）10：30－11：30 聖霊降臨節第 15 主日

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「へりくだる者は」

■聖 書：ルカによる福音書 14 章 7～14（新約 p136～137）

■讃美歌：13「みつかいととともに」

504「主よ、み手もて」

先週も、連日暑い日が続きました。何気なく見たテレビのニュースの映像で、新潟県の魚沼郡の水田が水不足で危機的な状況にあることを知りました。その時ふと、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」という詩の一節を思い出しました。本来は「ヒドリノトキハナミダヲナガシ サムサノナツハオロオロアルキ」という箇所なのですが、私はどういうわけか昔から「ヒデリノナツハオロオロアルキ」と間違えて覚えておりました。そのことを確認しながら、本当に今年の夏は、農家の方々にとっては涙を流すようなときになっているに違いないと思いました。その日以降は、朝の食前の祈りの時にこの異常気象で大雨や日照りによって被災されているの方々のためにも祈ることにしています。けれども、その詩の言葉と同時に、古今和歌集にある藤原敏行の「秋来ぬと目にはさやかに見えねども 風の音にぞおどろかれぬる」という有名な短歌を思い出しました。確かに、この立川でも朝晩には風が吹いています。来週には、少しは涼しくなることを願いつつ過ごしてまいりましょう。

さて、本日はルカによる福音書14章7節から14節をご一緒に読んでいます。この箇所は、9章51節から始まる主イエスがエルサレムへ向かう旅の途中の出来事です。14章1節から記されている、ある安息日の食事の場面の続きと考えられます。新約聖書の中では、共に食事をすることや特に婚宴などは、「神の国の宴」として「神の国の完成の姿」をたとえていることが多いのです。ですから、本日の箇所で語られているのは、小見出しにあるような単なる「客と招待する者への教訓」というマナーの問題に留まらず、「神の国とはどういうものか」ということを指し示していると言えるでしょう。

7節には「イエスは、招待を受けた客が上席を選ぶ様子に気づいて、彼らにたとえを話された」とあります。食事の席に招待された人々がやって来て、できるだけ上席に着こうとしている様子を主イエスをご覧になったのです。ファリサイ派の議員の家でのこの食事の席に招かれていた人々は、3節にもあったように「律法の専門家たちやファリサイ派の人々」が多かったのです。この人たちは、いつも人々から「先生」と呼ばれて尊敬を受け、招待されればいつも上席に案内されていたのでしょう。だから自分は上席

に着くものだという感覚が身についていたのでしょうか。主イエスはそういう彼らの姿を見て、8節から10節で婚宴に招待されたらどうふるまうべきかというたとえを語られました。日本の結婚式の披露宴などでは、あらかじめ様々な条件を考慮して席順が決まっていることが多いと思います。しかし、当時のイスラエルの宴会ではそうではなかったようです。けれども、主イエスが語られた婚宴のたとえのポイントは、上席に着いた者は後で末席の方に移動させられ、末席に着いた者は後で上席へと移動させられる、だから、最初は遠慮して上席よりも末席に着く方がよいなどと、単純にマナーの一つとして教えているのではないのです。ここで、先ほどお話ししたこの婚宴のたとえは神の国の完成のありさまを表している、ということをお出ししていただきたいと思います。主イエスが語ろうとしておられるポイントは、11節の「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」というところにあります。

そういうわけで、11節は「へりくだること」を勧めています。ここで、私たちが思い出したいのは、新約聖書のフィリピの信徒への手紙2章6節から8節の有名な「キリスト讃歌」と呼ばれる御言葉です。そこでは、「6 キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、7 かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、8 へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」と語られています。ここでの「へりくだって」は、本日の聖書箇所11節では「低くされ」と訳されている動詞です。この動詞の元になっているのは、普通は「身分が低い」と訳される言葉です。主イエスをご自分のことを「わたしは柔和で謙遜な者だから」とお語りになり、「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」と語られている箇所がマタイによる福音書11章にあります。ここでの「謙遜」という言葉は、もともとは「心において身分の低い者、心へりくだる者」という意味があると言われていました。では、主イエスはどのような意味でへりくだる者であり、身分の低い者であったのでしょうか。それは何よりも、神に対するへりくだりであったということでしょう。この出来事は、主イエスのエルサレムへの旅の途中でのことであると最初に申し上げました。そうすると、ここで既に、その旅の目的が主イエスの究極的な従順である十字架の死であることを指し示しているということも言えるのではないのでしょうか。さらに言えば、11節の「低くされ」「高められる」という受動態の形は、「神が低くし」「神が高めてくださる」ということであり、主なる神が主語であることをも表しています。

さらに13節で、「宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。」とお語りになりました。そのような人々に対する当時のイスラエル社会の見方は非常に差別的なものでした。旧約聖書を見ると、

レビ記21章17節では「障害のある者は、代々にわたって、神に食物をささげる務めをしてはならない。」とあり、続けて具体的に障がいのある者の描写がなされています。つまり、祭司への道が最初から断たれているのです。さらには、「目や足の不自由な者は神殿に入ってはならない」（サムエル記下5章8節）という箇所もあります。そのような状況があったことを考えれば、主イエスの語る「神の国」は、そのように差別されて排除されていた人々が奪われた人間性を取り戻し、すべての人が神の子どもとして等しく尊重される場所だと言えることができるでしょう。また、14節では「その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる」と語られています。それは、友人や知己や親族など自分と何らかのかかわりのある人びとを招いて「ギブアンドテイク」の関係を確認するというのではなく、お返しのできない人々を招いて「ギブアンドギブ」の関係を保ちなさい、そうすれば、神からの報いがあるということです。ここには、自分の生き方を人からの報いではなく、神との関わりの中で考えていくということが求められていると思います。私たちは神様からの愛を常にいただき、主イエスの恵みを常に受けています。けれども、私たちはそのことに気づかずにいることも多く、神様に何もお返しすることができない者です。しかし神様はそのような者をこそ、神の国の宴会の席へと招いて下さっているのです。本日、これから行われる聖餐式、それはまさに目に見える形で象徴的に示されている神の国の宴会です。私たちは主なる神様によって低くされて、私たちの贖いのために十字架にお架かりになった主イエスを記念する聖餐に与かり、そのことによって主なる神様によって高められてこの世に出てまいりましょう。そこに、本当の意味で他の人々にへりくだって歩むという道が開かれているのです。